連体·連用修飾

宇根谷　孝　子

要旨

本稿では、みえる構文における「動詞＋て」と連体修飾「動詞＋た」は節ではなく、動詞句であり、意味上・構造上の対応があると主張する。

まず、Unetani（1991）で論じたみえる構文の「動詞＋て」は、動詞の外項制限、Scope解釈の特徴からSではなく、VPではないかと示唆する。さらに、状態を表す「動詞＋た」表現も、「動詞＋て」と同様、動詞の外項制限があることからVPであると主張する。「た」の扱いについては、動詞につく不定（Infinitive）接辞であることを明らかにし、連体修飾用法の場合は「た」、連用修飾の場合は「て」となると説明する。

キーワード：連体·連用修飾、「動詞＋た」、みえる構文

1．はじめに

連体修飾、連用修飾の対応を示す例として（1）及び（2）が挙られる。

（1）赤い布が染まる。

（2）布が赤く染まる。

（1）では、形容詞句赤いは名詞句内で名詞布を連体修飾する。一方、連用修飾（2）では対応する形容詞句は赤くとなり、名詞を修飾する。

本稿の目的は、上記のような連体·連用の対応が動詞句についてもあるのではないかと仮定し、両構文の意味と構造的特徴を調べることである。

（3）太った男性が多い。

（4）男性は太ってみえる。

両構文の意味·構造の類似性から、（3）に示す状態表現「動詞＋た」と（4）に示すようなみえる構文における「動詞＋て」は、S（＝CP）ではなく、共に動詞句であり、前者は名詞句内にあって、名詞を連体修飾する動詞句であり、後者は動詞句内にあって、名詞を連用修飾する動詞句であると分析する。

分析の手順は、次の通りである。

Ⅰ）みえる構文と、明らかにSであるようにみえる構文と比較し、動詞の外項制限、Scopeの解釈の制限などから「動詞＋て」はSではないことを論じる。

Ⅱ）状態を表す「動詞＋た」もみえる構文と同様に、動詞の外項制限があることから、両構文の構造はSではなく、VP（動詞句）であると主張する。

Ⅲ）「た」の扱いについては、「て」と同様に、動詞につく不定（Infinitive）接辞であり、連体修飾用法の場合は「て」が「た」となるのではないかと示唆する。その根拠として、時制の区別がない、否定「ない」との共起制限、助動詞との共起制限を挙げる。

以上をまとめると、みえる構文内の「動詞＋て」と状態表現「動詞＋た」の意味・統語上の類似点·相違点は、前者が連用修飾VPであり、後者がそれに対応する連体修飾VPであると仮定すれば、説明できることがわかった。

2．みえる構文「動詞＋て」はS（＝CP）ではない

連体修飾「動詞＋た」の意味・構造の特徴について調べる前に、Unetani（1991）で述べた論点を基に、みえる構文「動詞＋て」がSではないとした根拠を簡単に紹介する。

Unetani（1991）では、以下に示すように「動詞＋て」みえる構文とようにみえる構文を比較し、その意味と構造の違いから「動詞＋て」はS（＝CP）ではないことを論じた[1]。その根拠として、時制の区別がないこと、Complementizer（補文詞）がないこと、動詞の制限、Scope解釈の違い、否定詞、助動詞との共起制限があることを指摘した。

まず、みえる構文「動詞＋て」は、以下の対比から明らかなように、時制の区別がない。

（5）　女性がやせてみえる。

（6）＊女性がやせたみえる。

（7）　女性がやせているようにみえる。

（8）　女性がやせていたようにみえる。

また、みえる構文内の「動詞＋て」はComplementizer（補文詞）と共起しない。

（9）　女性がやせてみえる。

（10）＊女性がやせてようにみえる。

（11）　女性の方がやせているようにみえる。

さらに、「動詞＋て」には動詞の共起制限がある。

（12）　女性がやせてみえる。

（13）＊女性が本を読んでみえる。

（14）＊女性が働いてみえる。

（13）に示されるように、他動詞は使えないこと、（14）に示されるように自動詞でも動作性動詞は使えないという特徴がある。

ところが、補文詞ようにを含むみえる構文では、そのような制限はない。

（15）　女性がやせているようにみえる。

（16）　女性が本を読んでいるようにみえる。

（17）　女性が働いているようにみえる。

もう一つ両者の統語的違いを示唆する証拠は、スコープの解釈の違いである。

（18）　なにかが輝いてみえる。

（18-a）輝いてみえる何かがある。

（18-b）＊輝いている何かがあるようにみえる。

（19）　なにかが輝いているようにみえる。

（19-a）輝いてみえる何かがある。

（19-b）輝いている何かがあるようにみえる。

（18-a）に示されるように、「動詞＋て」を含むみえる構文では、Wide Scopeの解釈しかない。ところが、ようにみえる構文では、（19-a）、（19-b）に示すように、Scopeに関して二通りの解釈が可能である。以下の対比で、「動詞＋て」を含む（21）が不自然であることは、（21）にはNarrow Scopeの解釈がないということ示唆する。

（20）遠くから見ると、何かが輝いているようにみえたが、近づくと何もなかった。

（21）？／＊遠くから見ると、何かが輝いてみえたが、近づくと何もなかった。

みえる構文「動詞＋て」がSであると仮定すると、ようにみえる構文との違いを説明することが難しいか、複雑になるが、VPであると仮定すると容易に説明できる。

以上、みえる構文「動詞＋て」はS（＝CP）ではなく、動詞句であるとする根拠を述べた。下記において動詞の制限

を中心として状態を表す「動詞＋た」の意味・構造の特徴を調べる。

3．状態を表す「動詞十た」表現

3.1．動詞分類と先行研究

見坊他（国語国立研究所報告25 1964）によると、状態を表す「動詞＋た」は、動作性動詞[2]と状態性動詞の二種類に分けられる。状態動詞は、さらに「ている」及び「動詞＋る」形式への置換可能性の有無から、四つのグループに分類できるという。

Ⅰ）動作性動詞

動作性動詞の中で「継続動詞＋た」は状態の意味をもたないが、次の例のような瞬間動詞は動作と状態の意味をもつ。

(22) さっき帽子をかぶった人

動詞かぶったは状態と動作の両方の意味をもつことができる。

(23) さっき帽子をかぶった人は

(24) さっき、帽子をかぶった人がきました。

(国立国語研究所 25：167)

(23) におけるかぶったはかぶるという動作がある時点以前に行われた、動作についての表現である。ところが、(24) では、かぶったはその人がきた際の状態を表現している。この場合にはかぶっていると置き換えても意味はかわらない。

動詞乗るについてもかぶると同様に、状態と動作の両方の意味があるという。

Ⅱ）状態性動詞

「動詞＋た」が状態の意味をもつ「動詞＋ている」あるいは「動詞＋る」と意味を変えることなく、置き換えるうるのかどうかによって、さらに四つのグループに分類している。(国立国語研究所報告25：167－8)

グループ	動詞＋ている	動詞＋る
A	＋	＋
B	＋	－
C	－	＋
D	－	－

A群の例：「動詞＋ている」及び「動詞＋る」に置き換えることができる。

異なった味、ちがった感じ、スポーツに関した文芸、最も適した文芸、動機を持った人間、川に沿った道

B群の例：「動詞＋ている」に置き換えることができるが、「動詞＋る」には置き換えられない。

しっかりした人物、猟犬に似た本能、馬鹿げた真似、ハムレットじみた心境、素人離れのした芸、婦人を連れたインド人、すぐれた映画、角ばった顔、見えすいた妨害、浮き浮きした表情、しゃれたアンサンブル、きわだった転換、ふっくらしたポケット、まちがった心得、下卑た言葉、気の利いたこと、才たけた女、手のこんだデッサン

C群の例：「動詞＋ている」には置き換えることができないが、「動詞＋る」に置き換えることができる。

そういった場合は、日本の神経中枢といった感じ、それに因んだ昔話

D群の例：「動詞＋ている」への置き換えも、「動詞＋る」への置き換えもできない。

大それた考え、表立った動き、ちょっとした思いつき、ふとした機会、こうした人々、ざっとしたいでたち、ほのぼのとした愛情、主立ったバラ団体、レッキとした右翼の闘士

四群の中で、B群に属するものが最も多く、数の上では、A或いはD群の三倍ある。Cはほとんどない。

上記の動詞分類の中で、特に動作性動詞群に注目し、構文の意味・構造上の問題点を探る。

3.2．問題の所在

上記に引用した国語国立研究所の研究報告25（1964）の中で指摘があるように、かぶる、乗る等の動作性動詞は、「動詞＋た」の形式をとる時、動作と状態の二つの意味をもつ。

ところが、他の構成要素との関係で調べてみると、必ずしも、状態の意味を示さない場合がある。以下に項構造と意味の関連をみる。

3.2.1．項構造上の制限

項構造とは、動詞が文法的に取る項を表示するものであると定義される。

Perlmutter（1978）が発表した非対格仮説（Unaccusative Hypothesis）によると、自動詞には二つのタイプがあり、一つは非能格動詞（Unergative Verbs）で、もう一つは非対格動詞（Unaccusative Verbs）である。非対格仮説は統語的仮説であり、この仮説に基づき二つのタイプの動詞の違いを説明すると、非能格動詞では、表層上の主語は項構造上の外項であるが、非対格動詞では、表層上の主語は項構造上ではその動詞の内項であるといえる。

このような観点から動詞を分類すると、他動詞（外項と内項を取る動詞）、非能各格動詞（外項を取る自動詞）、非対格動詞（外項を取らない自動詞）の3種類に分けられる[31]。

例えば、

(25) a. 他動詞　　x＜y＞ 読む、たたく、壊す

b. 非能格動詞　x＜　＞ 走る、飛ぶ、しゃべる

c. 非対格動詞　　＜y＞ 落ちる、ある、壊れる

「動詞＋た」と状態の意味との関係を観察してみると、項構造の違いが関係していることがわかった。まず、「他動詞＋た」の例をみる。

(26)　［帽子をかぶった］女性　（状態と動作の両方の意味がある）

(27) ＊［女性がかぶった］帽子　（状態の意味がない）

動詞かぶるが（26）のように目的語帽子と共起する場合、帽子をかぶったは、帽子をかぶっていると置き換えることができる。即ち、状態の意味がある。ところが、（27）のように「動詞＋た」の形式でも、動詞の外項女性と共起する場合、即ち、女性がかぶったでは、かぶったは動作を表し、状態の意味がなくなる。

動詞乗るでも同様である。

(28)　［自転車にのった］少年

(29) ＊［少年がのった］自転車

以上から、連体修飾「動詞＋た」表現において、使われる動詞が他動詞の場合、外項は修飾部に出現しないという制限があるといえる。

同じように格助詞「が」がついた名詞句でも、（30）の自動詞角張るや（31）の自動詞取れる等の動詞とは、共起可能である。

(30)［顔が角張った］人

(31)［取っ手が取れた］なべ

（30）及び（31）では、「動詞＋た」表現内に「が」のついた名詞句があっても、状態の意味をもつ。上記の例は、一見、「動詞＋た」状態表現には、外項制限があるという仮説への反証とみえるかもしれない。しかし、先に示したように、自動詞には二種類あり、上記の例は、内項をもつ非対格動詞であり、従って、真の反証ではない。

外項をもたない自動詞、即ち非対格動詞の場合、以下の（32）に示すように、「動詞＋た」が状態の意味をもつ。

(32)「自動詞（非対格動詞）＋た」の例

異なった味、ちがった感じ、最も適した文芸、しっかりした人物、馬鹿げた真似、ハムレットじみた心境、素人離れのした芸、すぐれた映画、角ばった顔、見えすいた妨害、浮き浮きした表情、しゃれたアンサンブル、きわだった転

換、ふっくらしたポケット、まちがった心得、下卑た言葉、気の利いたこと、才たけた女、手のこんだデッサン（国立国語研究所報告25（1964）を参照）

ところが外項をもつ非能格動詞は、(33) に示すように「動詞＋た」状態表現には現れない。

(33)「自動詞（非能格動詞）＋た」の例

＊走った人（状態の意味をもたないという意味で）、＊飛んだ人（左に同じ）等

以上、状態表現で使うことができる動詞は、自動詞の場合、非対格動詞しか使われないこと、他動詞では動詞の内項としか共起しないことから、「動詞＋た」構文は外項と共起しないという制限があるといえる。「動詞＋た」構文の全体構造を節であると考えたら、上記の項制限は説明ができないか、もしくは説明が複雑になるが、VP（動詞句）だと考えたら、上記の項制限を容易に説明できる。

3.2.2. 出現環境の制限

動詞の外項制限の他に、もう一つの統語的特徴として、出現環境の制限がある。体言用法の「動詞＋た」構文と修飾される名詞との関係から、NP下位に出現する構文には、二つの種類があるといわれている。いわゆる英語の関係詞節（Relative Clause）に相当するものと名詞句補文（Noun Complement）である。「動詞＋た」が状態の意味をもつのは、前者の場合だけである。

(34) 帽子をかぶった女性

(35) 帽子をかぶった理由

(34) のように、被修飾語女性が動詞かぶるの項（Argument）である場合、帽子をかぶったは状態の意味があるが、(35) の名詞理由のように、被修飾語が動詞の項でない場合、状態の意味はないし、時制も現在ではなく、過去である。もし、外項を含まないという制限をもつ連体修飾部の構造をVPとし、時制が現れる連体修飾部の構造をS（＝CP）としたら、意味の違いを説明できる。また、「動詞＋た」が状態の意味をもつためには、外項を含まないだけでなく、被修飾語は修飾部のV(動詞)の項でなければならない。言い換えれば、NP下位に、「動詞＋た」を含むVP Predicate（述語）とSubject（主語）から構成される修飾関係がなければならないといえる。

3.3.「た」の扱い

ここでは、「た」の扱いについて論じる。結論として、「た」は連体修飾する動詞句につく不定接辞であると主張する。その根拠として、アスペクト「ている」、否定「ない」及び助動詞との共起制限を挙げる。

まず、状態を表す「た」とアスペクト「ている」は共起しない。

(36)　太った人はよく汗をかく。　（現在の状態）

(37) ＊太っていた人はよく汗をかく。（過去の状態という意味で）

「ている」が付くと、(37) は過去時制となり、現在の状態を表す (36) とは違った意味になる。

また、状態を表す「た」は否定「ない」とも共起しない。

(38)　太った人はよく汗をかく。

(39) ＊太らなかった人はよく汗をかく。（状態の意味がないという意味で）

否定接辞が付くと、(39) で示すように、状態の意味を失う。

(40)［［太った］人］はいない。（現在）

(41) ＊［［太らなかった］人］はいない。（過去）

「ない」がつかない (40) では、現在時制である。ところが、動詞語幹に否定接辞の「ない」がつくと、「た」は過去接辞となり、状態の意味も消える。従って、否定接辞と共起しないといえる。

さらに、助動詞（AUX）との共起制限もある。

(42)　［曲がった［スプーン］］（変化と状態の両方の意味がある）

（43）＊[[曲ったかもしれない]スプーン]（変化のみで、状態の意味をもたない。）

（44）＊[[曲ったにちがいない]スプーン]（変化のみで、状態の意味をもたない。）

（42）に示すように、助動詞が付かない場合、動詞は変化と状態の両方の意味があるが、（43）及び（44）のように、助動詞「かもしれない」、「にちがいない」がそれぞれ「動詞＋た」につくと、状態の意味解釈はできない。その他の助動詞「らしい」も同様である。以上、共起制限を観察し、「た」の機能は、不定接辞であるとする根拠を明らかにした。連用修飾VPにつく不定接辞が「て」であるから、「た」はそれに対応して連体修飾VPにつく不定接辞であるといえる。

4．まとめ

ここでは、状態を表す「動詞＋た」とみえる構文の「動詞＋て」の意味・構造を分析し、従来、特異現象として捉えられてきた感のある「動詞＋た」と「動詞＋て」を、統一的に捉えることを目指した。

結果として、動詞の制限等から、「動詞＋た」と「動詞＋て」は、構造的に節ではなく、VPであることを明らかにした。また、動詞に付く「た」は「て」同様、不定接辞であり、「動詞＋た」は名詞句内で名詞を連体修飾し、連用修飾「動詞＋て」と対応することを指摘した。

本論文は、仮説を支持する事実の観察と発見に主眼を置き、理論的な裏付けや技術的な問題を残している。時間的制約のため、充分論じることができなかったこのような問題については、今後の課題とし、さらに研究を継続したい。

注：

1）ようにみえる構文が節（＝CP）であるという点については、Nakau（1973）を参照のこと。

2）ただし、狭い意味での動作ではなく、変化・作用など、状態を表すもの以外のすべてを含む。

3）動詞の非能格性・非対格性テストに関しては、Fujita（1988）、Miyagawa（1989）、Tsujimura（1991）、影山（1993）等参照。

参考文献：

奥津敬一郎．1996.「連体即連用？ 12変化動詞文 その一」『日本語学』15,10 : 76-83.

＿＿＿＿＿．1996.「連体即連用？ 13変化動詞文 その二」『日本語学』15,11 : 100-106.

＿＿＿＿＿．1996.「連体即連用？ 14変化動詞文 その三」『日本語学』15,12 : 100-106.

＿＿＿＿＿．1997.「連体即連用？ 15変化動詞文 その四―変化動詞文と連体・連用の対応―」『日本語学』16,1 : 92-99.

影山太郎．1993.『文法と語形成』ひつじ書房

見坊豪紀・水谷静夫・石綿敏雄・宮島達夫．1964.『現代雑誌九十種の用語用字（分析）』国立国語研究所報告25

金田一春彦．1976.「日本語動詞のテンスとアスペクト」『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房

鈴木重幸．1976.「日本語動詞のすがた」『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房

松本曜．1998.「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』 114:37-83.

Fujita, N. 1998. Genitive Subject in Japanese and universal grammar. Masters thesis, Ohio State University, Columbus.

Jones, Charles. 1991. *Purpose clauses: Syntax, thematics, and semantics of English purpose constructions.* Dordrecht: Kluwer.

Kishimoto, Hideki. 1996. Split Intransitivity in Japanese and the unaccusative hypothesis. *Language* 72.1. 248-286.

Miyagawa, Shigeru. 1989. Light verbs and the ergative hyoothesis. *Linguistic Inguiry* 20 : 4.

Nakau, M. 1973. *Sentential Complementation in Japanese*, Kaitakusha. Tokyo.

Perlmutter, David M. 1978. Impersonal passives and the unaccusative hypothesis. *Berkeley Linguistics Society* 4. 157-189.

Tsujimura, Natsuko. 1991. On the semantic properties of unaccusativity. *Journal of Japanese Linguistics* 13. 248-286.

Unetani, Takako. 1991. *Predication in Japanese.* Ph.D. dissertation, University of Hawaii, Honolulu.

Williams, Edwin. 1981. Morphology and argument structure. *The Linguistic Review* 1. 81-114.